

報告11 デンマーク

はたらく道らく

藺部 英夫（全国障害者問題研究会事務局長）

コペンハーゲンから北にバスで約 40 分。ヘルシンガー市は人口約 5 万人。シェークスピアの「ハムレット」の舞台となったクロンボー城（世界遺産）の城下町として発展した。20 年前の秋、デンマークで初めて訪ねた町だった。

生まれてから老いるまで人の顔の見えるような自治体サイズを感じて、学校、保育所、作業所、生活施設などを訪問して、今回で 4 度目となる。

＊

重い障害のある人たちが通う「仕事・体験センター（Center for Job og Oplevelse Nordves・CFJOO）」に着いた。昔のホイヴァンゲン作業所だ。

この＜CFJOO＞は 3 つの機能をもつ。作業アクティビティ（保護作業所）とデイケアセンター、加えて学校などと連携して食堂のスタッフとして働く場などだ。ちょうど「朝のつどい」がはじまっている（写真下）。

リーダーのクヌートによれば、

- ・CFJOO は、県営からヘルシンガー市営になった
- ・費用は生まれた自治体が、必要な費用を利用料として＜CFJOO＞に支払う＝社会サービス法 103 条（軽度者、一日 259DDK）、104 条（重度者、一日 669DDK）に基づく
- ・作業員（利用者）が 225 人、スタッフ 65 人（ペタゴー、大工、電気技師、PT 等）
- ・ここではデイケアセンター＋木工所＋テキスタイル工房＋厨房が働く場

木工所もテキスタイル工房も、20 年前とほとんど同じだ。でも、みんな、なにより楽しそうだ。仲間との語らいや関係も嬉しくてたまらない感じがする。



＊

お昼前に、軽い障害のある人たちが通う郊外の＜CFJOO＞（便宜上 CFJOO 2 とよぶ）に移動する。空は青く、日差しはきついけれど風は優しい。

ここがホイヴァンゲンと統合したのが 2003 年。それ以前は保護作業所で、隣町にある県営施設だった。いまは経営はヘルシンガー市に統合されたそう。作業員は 110 人、スタッフは 35 人。

- ・企業の研修会（チームワークを得るための）にこの場所を貸出している。利用はけっこう多い。
- ・重い障害の人でも参加できるハーブガーデンはなかなかのもの。
- ・丸太を買って、それを断裁して暖炉で使う薪にする仕事は売れ筋だそうだ。

＊

以下は、いくつかの質問へのクヌートの回答。

Q：法定雇用率はあるか？

A：ない。企業の社会的責任として障害者雇用に理解のある企業はある。

Q：賃金補填などの助成制度はどうなっているか？

A：作業員の 10 %が「フレックス・ジョブ＝最賃が保障される」を利用している。通常のフルタイム労働スタイルは無理なので。スコーネ・ジョブで厨房で働くと（6～10DDK／時）。だがそのことによって障害者年金は減額されない。

Q：食費は？

A：有料（所得保障がある。部屋代も払う）

Q：トラブルはないか。イジメや恋愛問題は？

A：人がいればトラブルがあるのは当然。人生の葛藤や愛のドラマもあって当然。それは多くの人びとの日常とそんなに変わらないのではないかな。

＊

作業員委員会（各職場からの 8 人で構成）があり、

年4回の役員会（議長も書記もする）を持ち、研修会の企画なども話し合いで決めているようだ。

みんなはそれぞれの作業場で働き、< CFJOO > のロゴの入った服装をし、毎月の給与を楽しみにしている。自分なりのアイデンティティがある。ここは遊び来ているのではなく仕事に来ているのだと。

＊

ミモザに似た黄色い花と緑の樹々。シャクナゲの群生も美しい。夕方（といっても白夜だから日はガンガン注いでいるけど）、自治体が、知的障害者のために設置した住宅の一角に「憩いの場」SPUC（特殊教育開発センター）を運営している。施設長のルーズ・モンストループが案内してくれた。

・SPUC（スブルク）の住人は 200 人。100 人は独立した住宅に、100 人はこのグループホームに住んでいます。

・みんななんらかの仕事をしています（SPUC 内の厨房で働いたり清掃する人たちもいる）

・余暇活動施設でもあり、スポーツ・アクティビティの日や森でジョギング、いろんな遊び、バンドも2つあり週2日練習し、演奏会にも出て行きます。

・ここの住宅は、

- 1) 知的障害がある高齢者のケアのあるセンター、
- 2) 重い障害があり 24 時間ケアを必要とする人のセンター、

- 3) 8つの独立したアパートに9人住んでいる

・申請に基づき市の判定委員会がどこに住んでもらうか決めている。

・この町では、おおよそ、重度者はクロンボーフスとここの 24 時間ケアセンター、グループホーム、独自の住宅で暮らしている。自治体は 24 時間対応の在宅ケアもしている。

・余暇活動の保障という考え方は、この町の場合、7、8年前に「仕事・体験センター」で働く人たちの 15 時～21 時の「余暇活動センター」として 126 人が登録。今は市外からも参加している。

・法的には 25 年前から、生活支援法（現・社会サービス法）にもとづく余暇活動。



「この 30 年でもものすごい変化があった」と彼女が言った。

＊

午前と午後に訪問した二つの「仕事・体験センター」。働く＝端（はた）らくには、誇り・プライド、アイデンティティを強く感じた。そして、働く場にはかけがえのない仲間がいた。

夕方の余暇活動の場では、気のおけない仲間たちとの交流があった。

仕事だけではない「道楽（どうらく）」＝「道（みち）らく」＝生活を、人生を楽にできること。

この二つが統一されて人生はゆたかに輝くのではないか。

＊

やっぱり、ここは 20 年前に訪問した「クロンボーフス障害者住宅＋アクティビティセンター」の跡地に、2 年前に建て変わった施設なんですよって！通訳の田口さんが教えてくれた。

当時、入所していたホイヴァンゲンで働いていた 9 人は、いまでもホイヴァンゲンで働き、15 時からはこのアクティビティに参加しているそうだ。

93 年に訪問したときは、わが家は 6 年遅れの「新婚」旅行を兼ねていた。当時 3 歳の娘はいま独立して、日本のペタゴー（生活支援員）になった。

歳月は瞬時に駆け抜けていくけれど、この町の時間は優しく時を刻んでいるようだ。

（藺部英夫）